

「道路政策の質の向上に資する技術研究開発」（令和2年度採択）

事後評価結果（公表用／ソフト分野）

番号	研究名	研究代表者	評価
2020-1	マルチスケールな拠点空間計画のための新たな行動モデル研究	東京大学 教授 羽藤 英二	B
<p><研究の概要></p> <p>自動走行交通ネットワークに対応した交通拠点整備計画において、従前の HWH のような単純な交通行動のパターンを前提にした手法論が、情報化、近居・遠居の浸透、経済の停滞を背景に転換を迫られている。本研究では、長距離バスや自動走行-シェアリング技術の進展に伴う、1) 交通拠点施設内と接続空間における3次元行動モデル、2)1km 四方の交通拠点近傍の人々の行動パターンの解析と予測、3)2次交通を含む都市圏域における人々の行動パターンの解析と高速計算手法の構築、4) 日本全体のマルチスケールな交通需要予測の解析方法を開発することを目的に実施する。</p> <p><事後評価結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別のモデルについては非常に独創的で興味深い。また、全国レベルから建物レベルまでのそれぞれのスケールにおける交通需要予測手法を用いたバスタ評価のガイドラインも、実務への適用という観点から有用と考える。一方、構築モデルの有機的な接続によるバスタ評価への適用可能性や方法論の提示が十分になされていないように思われる。 ・全国レベルから建物レベルまでのそれぞれのスケールにおける交通需要予測モデルの構築やデータ整備等の目的を達成した。一方、バスタ整備効果の計測・評価の実務的な手法を得るには、更なる取組みが必要と考えられる。 ・バスタの効果分析とマルチスケールな政策オプションの検討を一気通貫で行うという当初の目的までは必ずしも到達していないように思われる。 ・「一気通貫」は言い過ぎのように思われるが、たしかに、全国レベルから建物レベルまでのそれぞれのスケールにおけるモデルの構築に成功し、この分野の進展に大きな貢献をしている。 ・全国レベルから建物レベルまでのそれぞれのスケールにおける拠点空間計画のための新たな行動モデル研究として多くの知見が得られた。 ・開発された手法について、一連の事業での検証が期待される。 <p>このことから、研究目的は概ね達成され、研究成果があったと評価する。</p> <p><参考意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報を積み上げていった際に、合成の誤謬が生じていない、ということの確認が必要と思われる。 ・現場実装に向けて、より詳細な手順を記したマニュアルの作成など適用性向上に向けた検討が期待される。 			

※本事後評価は、新道路技術会議の各委員が評価を行い、第48回新道路技術会議において審議したものである。